

細胞診セルフアセスメント (増補版)

坂本 穆彦, 都竹 正文 著

群馬大教授・応用検査学

福 田 利 夫

本書の初版は1998年に発刊されています。たかが10年前と思われるですが、本書の姉妹書にあたる『細胞診を学ぶ人のために』の初版から約8年後のことです。『細胞診を学ぶ人のために』は病理組織学と細胞診断学とを有機的に結び付け、分かりやすく解説した教科書として、国内で細胞診を“学ぶ”人たちの新しいスタイルの教科書として好評を持って迎えられ、15年間に3回の改訂が行われて現在の4版に至っています。

本書『細胞診セルフアセスメント 増補版』は細胞診の知識の習得度を自分で確認するための設問集という形態をとっており、『細胞診を学ぶ人のために』で学んだ知識を実際の症例と問題を用いて確認できるように五肢択一式の画像スライド問題と学科問題の2部で構成されています。

第1部のスライド問題では、婦人科・呼吸器領域の病変に始まり、消化器、泌尿器、乳腺、甲状腺、リンパ節、骨・軟部、体腔、中枢神経系など、細胞診の対象となるすべての領域について、典型例の細胞像の明瞭な写真と明解な解説がセットで掲載されており、実際の試験形式で学

ぶことができます。なお、今回の増補版では子宮頸部の液状検体も掲載され、ベテスダシステムでの解答と解説があり、最新の技法と診断基準についての知識の確認もできます。

第2部の学科問題では検体処理、染色、観察、細胞形態、病変の基礎知識に始まり、婦人科領域、非婦人科領域に分けて、細胞診に必要な、解剖学的、組織学的、生理学的、病理学的知識に始まり、各種病変の細胞所見についての知識の確認ができます。今回の増補版では、問題の取舍選択が慎重に行われ、全体のおよそ3分の1の問題について、改変、追加、削除が行われ、より適切な設問を解いていくことにより、確実な知識を身に付けることができます。

本書の初版発行から10年の間に「癌(腫瘍)取扱い規約」の改訂に伴った用語の変更、腫瘍の概念の変遷も起きており、増補版では、それらを忠実に取り入れて用語の変更も行われました。例えば、腺棘癌は腺棘細胞癌に、未分化胚細胞腫は未分化胚腫に名称が変わり、消化管の平滑筋肉腫と呼ばれたものは消化管間質腫瘍と訂正され、最新の知識を確認することができます。

今回の増補版の編集、執筆も坂本

穆彦教授、都竹正文氏を中心に綿密に行われました。都竹氏が増補版の完成前に病魔により逝去されたのは残念至極ですが、日本を代表する細胞診専門医、細胞検査士の相互協力の下に初版のみならず、増補版が編集された意義は大きく、診断はもとより専門医、細胞検査士の教育にも両職種のコラボレーションがなくてはならないことを本書をもって示されたものと思われます。

現在、細胞診に関して比較的新しい内容の教科書やアトラスが国内に数種出版されていますが、本書のように細胞検査士や細胞診専門医・指導医を目指す人々にとって、知識の習得度を自分で確認するための設問集として版を重ね、最新の内容が充実している教科書は他に類を見ないものです。編集、執筆を担当された方々の大変なご努力によって改訂されたこの『細胞診セルフアセスメント』を細胞診断学に携わる方々の必携の書としてぜひお勧めしたいと思います。

●B5 頁248 2008年 定価7,350円
(本体7,000円+税5%)

医学書院 刊(☎03-3817-5657)